

# 彦根藩地方知行制における給所の存在形態

——愛知郡青山村の事例——

増 田 巧

## はじめに

彦根藩の地方知行制における給所の存在形態については矢守一彦氏により、①多くの給所が相給であつたこと、②その場合、各給人への土地及び百姓の割り付けが行なわれたこと、③割り付けられた百姓はそれぞれ組を構成したこと、④組には組頭が設置されたこと、⑤組は年貢負担の連帯責任を負つたことなどが指摘されている<sup>①</sup>。

ところで、右の指摘はいずれも、知行割の特質や給人と給所の結びつきについて論じられるなかで、断片的になされたものである。そこでは給所の具体例として、愛知郡小田苅村、犬上郡四手村のわずかな事例をあげられるにすぎない。しかも、前者は組の編成、後者は組頭の設置及び年貢負担の連帯責任の事例と、それぞれ断片的なものである。したがって、彦根藩の給所の存在形態としては、給所の具体例が不足している状況にあると言える。

このような状況において、本稿は愛知郡青山村における給所の存在形態について分析を加えるものである。一つの村を対象に、給人の知行状況、給所の編成状況、給所の組織、給所の支配構造の各点から分析を加えることによって給所の具体像を明らかにしたい。

なお、史料的な制約により、本稿での分析は万治三年以降のものとなる。彦根藩の地方知行制については藤井讓

表 1 給人の知行状況

年代	給 人 名					
万治 3	西山内蔵亮 59.685石	三浦十左衛門 95.768石	匂坂縫殿之介 121.222石	石原主膳 120.888石	二宮善弥 61.537石	
元禄4頃	西山 59.685石	善之丞(三浦) 95.768石	匂坂縫殿助 121.222石	半蔵(三浦) 80.072石	彦惣A(近藤々) 20.721石	彦惣B 81.632石
未詳①					今堀弥太夫 40.816石	森河五助 40.816石
宝暦 6	西山蔵之丞 59.685石	松平一学明所 95.768石	向坂伝之丞 121.222石	三浦半蔵明所 80.072石	明所 20.721石	平岡十郎平 40.816石
未詳②					明所 20.721石	平岡音吉 川手 16.326石 24.49石
文政12	西山内蔵允 73.113石	松平倉之介 117.315石	向坂縫殿介 148.497石		平岡十郎平 20石	
天保10	(西山)	(松平)	(向坂)	(三浦)	(平岡)	(森川)
嘉永 5	(西山)	(松平)	(向坂)	(三浦)	(平岡)	(森川)
明治元	(西山)	(松平)		(三浦)	(平岡)	(大久保) (只木) (西尾)
明治 8	(西山)	(松平)		(三浦)	(平岡)	(森川) (大久保) (只木) (西尾)

備考) ①給人名は典拠に記されているものをそのまま示した。元禄4年頃の「彦惣」分については区別するため A、B を付した。  
 ②給人名の下の数値は知行高を表す。  
 ③年代未詳①は元禄4年頃の典拠に後筆で書き加えられたものを典拠としており、その次に配列した。未詳②は給人及びその知行高から文政12年の前後と思われる。詳細は不明であるが、取り敢えず文政12年の前に配列した。  
 ④天保10年以降は百姓の組名に拠っているため括弧で括った。  
 ⑤各年代の給人は他の表と比較しやすいように適宜配列した。

治氏により、正保二年の「四つならし」(後述)を転換点とし、万治二年の指口米の給人への給付をもって完成することが指摘されている<sup>②</sup>。したがって、本稿での分析は、彦根藩の地方知行制が完成して以降のものとなる。

## 一 給人の知行状況

表<sup>③</sup>1は青山村の給人知行状況についての表である。いくつか補足をしておく。

まず、文政十二年の知行高とほかの年代の知行高とが異なっている点についてであるが、これは彦根藩が正保二年に実施する「四つならし」と呼ばれる政策による。すなわち、「四つならし」とは「年貢高をもとに、その年貢率が四〇%となるよう村高を設定し、その高をもって家臣に給所を与え、家臣の収入を知行高に対し「四つ」すなわち四〇%とする仕法<sup>④</sup>」である。これによって新たに村高の設定がなされる。

次の史料は給所の指口米の上納についての筋奉行らの達書である。先述の万治二年における給人への指口米給付に關して發給されたものと思われる。なお、筋奉行は彦根藩において地方支配の中心を担う役職である。

史料 1

寛

本高四百五拾九石斗  
一五十六拾貳石三斗九升八合

愛知

青山村

内

本高百貳拾石八斗八升八合

百四拾八石八升八合

石原主膳

本高百貳拾石貳斗貳升貳合

百四拾八石四斗九升七合

匂坂縫殿之介

本高九拾五石七斗六升七合

百拾七石三斗斗壹升五合

三浦十左衛門尉

本高五拾九石六斗斗升五合

七拾三石壹斗壹升三合

西山内蔵亮

本高六拾石五斗三升七合

七拾五石三斗八升五合

二宮善弥

右之通先年御知行所新高之内ニ而指口米之分引候而、只今之新高書付如此ニ候間、当子之年子四つ物成ニ指口米加へ御年貢納所可申候、以上

万治三年

子之

七月廿八日

石原甚五左衛門尉（印）

河手四方左衛門尉（印）

竹原与惣左衛門尉（印）

彦根藩地方知行制における給所の存在形態

山下弥惣兵衛

安藤七郎右衛門尉（印）

太田甚左衛門尉（印）

大久保勘兵衛（印）

右之村

庄や

百姓中

ここでは給人の知行高がそれぞれ二つずつ書き上げられているが、「本高」とある方が「四つならし」前の高で、石高のみの方が「四つならし」後の高である。文政十二年の知行高はここの「四つならし」後の高と一致している。なお、正保二年以降も「四つならし」前の村高が検地帳、免状などで機能している。

次に、明治元年と同八年についてであるが、青山村は井伊直弼の一件に伴い上知となる村であり、慶応元年には信楽代官多羅尾主税の支配所となっている<sup>(9)</sup>。したがって、慶応元年以降、彦根藩の給人に知行されることはない。しかし、表によれば明治元年、さらには同八年において、給人名を冠した組が現れている。ここでは給所の組織として編成された組が、変質して機能している状況が確認できる。なお、両年とも上知となる以前の給人知行をある程度、反映したものと思われる。ここでは嘉永五年から上知までの知行状況の参考として示した。

さて、表1から指摘できる点は次の通りである。

まず、青山村は複数の給人に分割知行される相給の給所村落であった。冒頭で述べた通り、彦根藩では給所の多くが相給であったことが指摘されている。表によれば、青山村は万治三年以降、幕末に至るまで常に複数の給人に知行されており、相給の給所村落であったことが確認できる。

また、給人は固定的でなく、近世を通して何度かの知行の割り替えが行なわれている。そして、その際には単に

給人が交代するだけでなく、知行の分割再編も伴っている。矢守氏は「正保以降は幕末に至るまで知行所割に変更なかったものと見做しうる」<sup>⑩</sup>とされているが、ここでは「四つならし」以降も知行の割り替えが行なわれていたことが確認できる。

なお、「四つならし」以降、彦根藩では蔵入の村と給所の村とが区別されたことが指摘されている。<sup>⑪</sup>表によれば万治三年以降、幕末に至るまで青山村では給人知行が存続しており、正保二年の「四つならし」以降、給所に設定された村であったことが分かる。なお、「四つならし」以前の状況については史料が残らず不明である。

## 二 給所の編成状況

前章で見た通り青山村は相給の給所村落であった。これに伴って青山村は分郷されることとなる。ここでは分郷による給所の編成状況について見る。

さて、相給に伴う分郷の形態としては、土地及び百姓の給人への割り付けが想定される。

まず、土地の割り付けであるが、青山村にはそれに関する史料が残されておらず、確認できない。検地帳は寛文元年のものと年未詳のものが二冊残されているが、いずれも給人分付などは見られない。また田畑の売買証文<sup>⑬</sup>なども同様である。

次に、百姓の割り付けであるが、青山村では給人分付された組や給人名を冠した組が編成されており、実施されていたことが確認できる。表2はそれについて示したものである。<sup>⑭</sup>

ところで、前章で見た通り青山村では近世を通して何度かの知行の割り替えが行なわれる。表2によれば、それに伴って組の分割、再編が行なわれており、知行割に際し新たに分郷が行なわれていたことが確認できる。そのと

表 2 給所の編成状況

年代	組 名					
寛文 5	(西山内蔵亮分)	(三浦十左衛門分)	(勾板藏殿之介分)	(石原主膳分)	(二宮善弥分)	
	市郎右衛門組	半右衛門組	門三郎組	伝右衛門組	九兵衛組	
	66.3749石	77.4015石	122.058石	123.4274石	52.6041石	
元禄 4	(西山分)	(三浦善之丞分)	(勾板藏殿助分)	(三浦半藏分)	(彦惣 A 分)	(彦惣 B 分)
	市左衛門組	十右衛門組	茂左衛門組	善太郎組	吉三郎組	又左衛門組
	65.7408石	77.2629石	122.0582石	81.6776石	19.6675石	71.9472石
未詳				今堀弥太夫分 長蔵組	森河五助分 徳兵衛組	
				35.6686石	36.0844石	
天保10	西山組	松平組	向坂組	三浦組	平岡組	森川組
	88.7212石 10名	80.5534石 9名	118.4438石 14名	50.645石 7名	49.9612石 6名	12.5981石 2名
嘉永 5	西山組	松平組	向坂組	三浦組	平岡組	森川組
	6名	8名	12名	8名	4名	2名
明治元	西山組	松平組		三浦組	平岡組	大久保組 只木組 西尾組
	10名	5名		5名	3名	2名 1名 5名
明治 8	西山組	松平組		三浦組	平岡組	森川組 大久保組 只木組 西尾組
	11名	9名		7名	6名	2名 5名 3名 6名

備考) ①給人は明らかとなる分のみ示した。寛文 5 年については万治 3 年の、元禄 4 年については元禄 4 年頃の給人を参考として示した。その根拠については注 (12) 参照。未詳については典拠に付記記載がされている。  
 ②組名の下の数値について、寛文元年から未詳までは組の「有高」を、天保10年は組構成員持高合計及び構成員数を、嘉永 5 年以降は構成員数を表す。なお、構成員数は典拠に書き上げられた者の人数であり、構成員全てを表すものではない。例えば嘉永 5 年には御種情米の借用を受けない者は現れない。その他についても同様である。  
 ③明治元年、同 8 年については、青山村が上知となる以前の状況にある程度、反映したものと思われる。ここでは、参考として示した。  
 ④各年代の組は他の表と比較しやすいように適宜配列した。

表 3—① 寛文 5 年の組「有高」

分類	市郎右衛門組	半右衛門組	門三郎組	伝右衛門組	九兵衛組	伝右衛門以下計
い田	45.7029石	58.2824石	89.631石	85.0616石	34.2854石	119.347石
の田	13.8226石	14.5358石	21.9036石	26.5737石	13.728石	40.3017石
荒	6.8494石	4.5833石	10.5234石	11.7921石	4.5907石	16.3828石
計	66.3749石	77.4015石	122.058石	123.4274石	52.6041石	176.0315石

表 3—② 元禄 4 年の組「有高」

分類	市左衛門組	十右衛門組	茂左衛門組	善太郎組	吉三郎組	又左衛門組	善太郎組以下計
い田	45.0909石	58.1438石	89.6312石	58.109石	11.993石	46.5792石	116.6812石
の田	13.8226石	14.5358石	21.9036石	15.2966石	6.0061石	18.999石	40.3017石
荒	6.8273石	4.5833石	10.5234石	8.272石	1.6684石	6.369石	16.3094石
計	65.7408石	77.2629石	122.0582石	81.6776石	19.6675石	71.9472石	173.2923石

表 3—③ 年代未詳の組「有高」

分類	長蔵組	徳兵衛組	計
い田	23.0058石	23.3791石	46.3849石
の田	9.4653石	9.5338石	18.9991石
荒	3.1975石	3.1715石	6.369石
計	35.6686石	36.0844石	71.753石

備考) 寛文 5 年については伝右衛門組と九兵衛組、元禄 4 年については善太郎組と吉三郎組と又左衛門組の合計高を末尾に示した。

きの状況について、いくつか表をあげ見ておきたい。

まず、表3は寛文五年、元禄四年、年代末詳の各組「有高」の内訳を示したものである。「有高」は各組の構成員の持高の合計を表す。<sup>(15)</sup>ところで、「有高」は「い田」、「の田」、「荒」に分類されているが、これは青山村特有で、「い田」は村域を横断する河岸段丘の下側、「の田」は上側、「荒」は両方に分布する荒地を表す。<sup>(16)</sup>なお、「荒」は「木原」「木荒」などと表記されることもあるがここでは「荒」で統一する。

さて、表1によれば万治三年から元禄四年頃の間には石原主膳と二宮善弥の知行が、三浦半蔵と「彦惣」Aと「彦惣」Bの知行に割り替えられる。これに伴い青山村では分郷が行なわれるわけであるが、表3によれば①の伝右衛門組と九兵衛組の「有高」合計と、②の善太郎組と吉三郎組と又左衛門組の「有高」合計とが、各分類ごとで一致しないしは近似している。これにより知行割に伴う分郷は、①の伝右衛門組と九兵衛組を、②の善太郎組と吉三郎組と又左衛門組に分割することによって行なわれていたことが分かる。

また、元禄四年頃以降に「彦惣」Bの知行が、今堀弥太夫及び森河五助の知行に割り替えられる。これについても③の又左衛門組の「有高」と、②の長蔵組と徳兵衛組の「有高」合計が、各分類ごとで一致しないしは近似しており、ここでも分郷が②の又左衛門組を③の長蔵組、徳兵衛組に分割することによって行なわれたことが分かる。

これに対して知行に変更がない①の市郎右衛門組、半右衛門組、門三郎組と、②の市左衛門組、十右衛門組、茂左衛門組ではそれぞれ「有高」が、各分類ごとで一致しないしは近似しており、分郷には特に関わりがなかったことが分かる。また③についても、その典拠は②の典拠とともに綴られたものであり、そこには長蔵組、徳兵衛組についての記載しかない。おそらく分郷により改められた情報のみを示したのであろう。ほかの組は分郷に関わりなかったものと思われる。

次に、表4は天保十年、嘉永五年、明治元年、明治八年の各組構成員を示したものである。<sup>(18)</sup>

表 4－① 天保10年の構成員

西山組	松平組	向坂組	三浦組	平岡組	森川組
市右衛門 喜兵衛 久次郎 原四郎 権右衛門 重蔵 新蔵 忠蔵 藤七 利左衛門	嘉右衛門 嘉平 原七 源兵衛 庄兵衛 善次郎 太郎兵衛 半次郎 利右衛門	卯兵衛 原松 新助 善五兵衛 太郎右衛門 丹治郎 忠右衛門 忠五郎 忠助 長右衛門 長左衛門 茂右衛門 紋三郎 弥平	岩蔵 原次郎 次右衛門 庄左衛門 伝右衛門 普泉庵 林蔵	九兵衛 小平 常吉 新次郎 亦右衛門 林次郎	情兵衛 伝四郎
10名	9名	14名	7名	6名	2名

表 4－② 嘉永5年の構成員

西山組	松平組	向坂組	三浦組	平岡組	森川組
市平 喜平 清右衛門 新蔵 甚平 藤七	嘉右衛門 嘉平 源兵衛 情蔵 庄平 善治郎 半治郎 利右衛門	源左衛門 新兵衛 善五平 太郎治 丹治 忠五郎 忠兵衛 長右衛門 長左衛門 茂右衛門 紋治郎 弥兵衛	岩蔵 源治郎 源八 庄吉 竹蔵 長平 伝右衛門 普泉庵	磯治 庄右衛門 又右衛門 林治	勘蔵 情平
6名	8名	12名	8名	4名	2名

表 4－③ 明治元年の構成員

西山組	松平組		三浦組	平岡組		大久保組	只木組	西尾組
市右衛門 市平 岩吉 喜平 久次郎 金右衛門 重蔵 新蔵 藤七 利左衛門	嘉右衛門 重右衛門 庄次郎 善右衛門 利右衛門		岩蔵 喜左衛門 源次郎 長兵衛 伝右衛門	磯治 小平 弥吉		新兵衛 丹次郎	忠五郎	源左衛門 源松 重吉 茂右衛門 弥平
10名	5名		5名	3名		2名	1名	5名

表 4－④ 明治8年の構成員

西山組	松平組		三浦組	平岡組	森川組	大久保組	只木組	西尾組
市右衛門 市平 岩吉 喜平 休治郎 清右衛門 金右衛門 重治郎 新七 甚平 藤七	嘉右衛門 源七 源兵衛 条吉 重右衛門 庄治 寅吉 寅治郎 利右衛門		岩蔵 元治郎 源治郎 庄左衛門 長平 伝右衛門 林蔵	九兵衛 小兵衛 庄右衛門 彦治郎 又右衛門 勇蔵	吉平 伝四郎	吉太郎 儀平 左七 新平 善五平	忠五郎 長左衛門 長蔵	伊之吉 源左衛門 重吉 茂右衛門 紋三郎 弥平
11名	9名		7名	6名	2名	5名	3名	6名



表5 天保10年の組別階層構成

階層	西山組	松平組	向坂組	三浦組	平岡組	森川組	村全体
20～25			1				1
15～20	2			1			3
10～15	1	3	4	1	2		11
5～10	6	5	6	3	4	2	26
1～5	1	1	2	1			5
1石以下			1	1			2
計	10	9	14	7	6	2	48

表2によれば嘉永五年以降、向坂組が見られなくなり、代わって大久保組、只木組、西尾組が現れる。おそらく嘉永五年以降に知行割が行なわれ、分郷が実施されたものと思われる。

その構成員について見ると①の向坂組の一四名のうち、③の大久保組、只木組、西尾組で五名、④の同三組で六名が確認できる。また、②の向坂組の一二名のうち、③の大久保組、只木組、西尾組で五名、④の同三組で七名が確認できる。また、いずれも確認できない者がほかの組に現れることはない。これにより、嘉永五年以降、青山村では分郷が行なわれ、そこでは向坂組が大久保組、只木組、西尾組に分割されていたことが分かる。なお、分郷の前提となる知行割の状況、正確な給人名、知行高については史料が残らず不明である。

さて、表2のうち天保十年については各組の階層構成が明らかとなるので見ておきたい。表5はそれについて示したものである。これによればいづれの組も五～一〇石層を中心、一〇～一五石層、一五石層など、周辺階層に広がるという階層構成となっている。すなわち、天保十年の段階において青山村では、特定の組に特定の階層が偏在するという状況は見られず、各組間で均等な階層構成となっている。

### 三 給所の組織

給所の組織としては組が編成され、組頭が設置されている。前者の組の編成については前章で見た通りである。

後者の組頭の設置については表2において「市郎右衛門組」などとあるごとくである。ここでは補足として嘉永五年「御殿様御巡見附借物人足帳」<sup>(20)</sup>の表紙部分をあげておく。

史料2

(表紙)  
嘉永五年

庄屋

源左衛門

御殿様御巡見附借物人足帳

横目

子二月吉日

新蔵

(裏表紙)

西山 組頭

清吉

向坂 同

源左衛門

松平 同

柳治

平岡 同

亀蔵

三浦 同

長平

森川 同

情兵衛

甚蔵

表6 寛文元年の階層構成

階層	屋敷持	無屋敷	入作	計
10～15	12	1		13
5～10	29	1		30
1～5	7	3	1	11
1石以下	2	4	5	11
計	50	9	6	65

表2における組頭のうち寛文五年については寛文元年の検地帳により持高が判明する。それによると市郎右衛門は一一石余、半右衛門は八石余、門三郎は一二石余、伝右衛門は八石余、九兵衛は四石余となっている。同じく寛文元年の検地帳により作成した階層構成表が表6である。これによれば組頭は一石以下の全ての階層にわたっている。すなわち、寛文期において青山村では組頭に階層的な傾向は見られない。

なお組頭の具体的な役割、その選出方法などについては史料が残らず不明である。

#### 四 給所の支配構造

給所に対する主な支配の内容として、藩による年貢の割り付けと、給人による年貢の収納があげられる。<sup>(22)</sup>これについて、後者の年貢収納については青山村には史料が残らず、その状況を見ることはできない。ここでは、前者の年貢の割り付けのあり方を見ることにより、給所の支配構造の一端を明らかにしておきたい。

史料<sup>3</sup>

覚

本高  
一四百五拾九石壺斗

愛智郡

青山村

物成式百式石四合

四ツ四分

右当亥之御物成、各相談之上如此相極候条、来ル霜月廿日以前二急度皆済可仕者也

天和三亥十一月十五日

岡頼<sup>(岡頼母)</sup> 頼<sup>(印)</sup>

青<sup>(青木平左衛門)</sup> 平左<sup>(印)</sup>

太<sup>(太田甚左衛門)</sup> 甚左<sup>(印)</sup>

浅<sup>(浅居庄太夫)</sup> 庄太<sup>(印)</sup>

宇<sup>(宇津木六之丞)</sup> 六<sup>(印)</sup>

勝<sup>(勝野五太夫)</sup> 五太<sup>(印)</sup>

右之村

庄屋

惣百姓中

彦根藩では給所村落への免状発給は筋奉行によってなされていたことが指摘されている。<sup>24</sup> 右の差出の六名はいずれも筋奉行である。さて、ここで注目したいのは、村に対して免状が発給され、年貢は村として一括されているという点である。青山村には右のほか、寛文十二年から元治元年まで一七四点の免状<sup>25</sup>が残されているが、この点についてはいずれの免状においても同じである。したがって、相給の給所村落である青山村の場合、村に割り付けられた年貢は、さらに村内で給所に割り付けられる必要がある。

これについて、次の史料<sup>27</sup>が残されている。長くなるがあげておく。なお、史料自体は横折紙八枚をランダムな状態で綴じたものである。

史料 4

①（一丁目表）

辰川欠うせ

中田七歩

久右衛門

高三升三合八勺

中田拾貳歩

善<sup>兵へ</sup>右衛門

五升八合

上田壱畝廿四歩

小介

高貳斗八升八合

上田廿壱歩

小十郎

高壱斗一升貳合

上田廿六歩

忠二郎

高壱斗三升八合六勺

中田五畝十歩

長右衛門

高七斗七升三合三勺

中田三畝拾歩

伝三郎

高四斗八升三合三勺

上田三畝十六歩

伝左衛門  
善右

高五斗六升五合四勺

上田壱畝四歩

二郎太郎。

高壱斗八升壱合七勺

上十五歩

久五郎

高八升

(二丁目裏)

上田貳畝三歩

惣兵へ。

高三斗三升六合

上畠廿九歩

惣三郎。

高貳斗七升六合

下畑八歩

九兵へ

高貳升六合六勺

下畑廿貳歩

伝三郎

彦根藩地方知行制における給所の存在形態

高七升三合三勺

木原拾歩

久右衛門

高三升六合六勺

同四歩

久三郎。

高壺升四合六勺

同六歩

惣三郎。

高貳升貳合

同八歩午年ニ川欠引

同人

高貳升九合三勺

川欠高畑高共

一貳石九斗九升八合九勺

又貳升九合三勺五郎兵へ分引

木原川欠うせ

七升三合貳勺

② (二丁目表)

本米

一 六六  
■升■合

荒開物成

甘壺歩 うわまい

杓 壺石三斗七升三合八勺

さし口 壹斗一升貳合

𠂔 石四斗八升五合八勺

𠂔 石五斗壹升九合

さし口 米共荒開共二

都合 貳石三斗貳升壹合五勺

一上四畝拾九歩

善左衛門

四斗六升三合三勺

一中壹畝歩

同人

八升

𠂔 五斗四升三合三勺

さし口 八斗四升四合三勺

五斗八升七合六勺

一中貳畝拾四歩

理右衛門

壹斗九升七合四勺

さし口 一升六合壹勺

𠂔 貳斗一升三合五勺

一下々廿四歩

弥五郎

彦根藩地方知行制における給所の存在形態

三升式合

さし口式合六勺

ノ三升四合六勺

(二丁目裏)

元禄四年

未十一月十六日

曾根村出作書出シ

上屯畝歩

曾根村  
次左衛門

中屯畝廿三步

同人

一上拾三步

惣田

一下々四歩

惣中

一上式畝歩

一下屯畝廿八歩

一上大式畝拾式歩

一中五畝歩

七畝歩

一下三畝歩

式畝十四歩

一下々四畝十四歩

式畝十四歩

上田三畝十三歩



三斗四升三合四勺

中耆反耆畝五歩

八斗九升三合三勺

下四畝廿八歩

式斗九升六合

下々式畝十八歩

耆斗四合

③ (三丁目表)

未ノ十一月

〃五つ四分六りん三毛

い田有高川欠引而残り

一三百九石<sup>五</sup>八斗<sup>三</sup>式升<sup>四</sup>式合四勺

取百六拾九石式斗五合六勺

ノ田有高四つ<sup>四</sup>五分六りん三毛

一九十石五斗<sup>二</sup>六升三合七勺

取四拾石四斗一升八合

都合式百九石六斗式升三合六勺

彦根藩地方知行制における給所の存在形態

荒高

一三拾壹石四斗三升八合

取三石九斗三升

荒高

一三拾八石貳斗六升五合三勺

御取壹つ貳分五りん

四石七斗八升三合壹勺

④ (四丁目表)

未ノ十一月十六日

六組の荒物成

反ニ壹斗

川欠引而

一七反五畝六歩

善太郎

取七斗五升貳合

さし口六升壹合三勺

八斗一升■合三勺

川欠引而

一五反九畝八歩

又左衛門

取五斗九升貳合七勺六斗貳合七勺

さし口四升九合三勺九合三勺

六斗五升壹合八勺五升

一四反三畝廿歩

取四斗三升六合七勺

さし口三升五合六勺

六斗七升貳合三勺

川欠引而

一六反貳畝四歩

取六斗貳升壹合四勺

さし口五升七勺

六斗七升貳合壹勺

(四丁目裏)

一九反五畝十八歩

取九斗九升六合七勺

さし口八升壹合貳勺

六斗七升七合九勺

一壹反五畝十一歩

吉三郎

十右衛門

市左衛門

茂左衛門

取壺斗五升三合七勺

さし口一升貳合五勺

ノ 壺斗六升六合貳勺

都合三石八斗<sup>斗</sup>五升三合六勺

曾根村出作

貳石三斗貳升壺合五勺

さし口米共

一四斗荒關共

うわまい

惣ノ

ノ 六石五斗七升五合

未御物成

一百九十九石八斗九升貳合

さし口十六石貳斗九升壺合貳勺

ノ 貳百十六石壺斗八升三合

内六石五斗七升五合

⑤ (五丁目表)

(目安四ツ六分四りん五カ)

[illegible]

一八拾石七升貳合

御取三拾七石𪔐斗九升三合五勺

勾坂縫殿助様

御取五拾六石三斗七合六勺

善之丞様

御取四拾四石四斗八升四合

西山様

御取貳拾七石七斗貳升三合七勺

彦惣様入吉兵へ組

御取九石六斗貳升五合

一八拾壺石六斗三升貳合

御取三拾七石九斗一升八合

彦根藩地方知行制における給所の存在形態

都合四百五拾石<sup>九</sup>壹斗

一四拾石八斗壹升六合

弥太夫様分

一四拾石八斗壹升六合

五助様

⑥ (六丁目表)

元禄四年

未之十一月十六日

上下有高川欠引而残り

井田有高川欠引而

十右衛門

一五拾八石壹斗四升三合八勺

ノ田有高

同人

一拾四石五斗三升五合八勺

有荒高 四反壹畝廿歩木原

一四石五斗八升三合三勺



い田有高川欠引而

市左衛門

一四拾五石九升九勺

ノ田

一拾三石八斗貳升貳合六勺

有高六反貳畝貳步川欠引而

一六石八斗貳升七合三勺

(六丁目裏)

有高

茂左衛門

一八拾九石六斗三升■合貳合貳勺

ノ田有高

一貳拾壹石九斗三合六勺

荒有高九反五畝廿步

一拾石五斗貳升三合四勺

善太郎

一五拾九石六斗九升老合

内老石五斗九升■貳合引

い田

有高川欠引而残り

善太郎組

一五拾八石■斗九升七合貳勺

老斗九合

■九升九合

ノ田

一拾五石貳斗九升六合六勺

荒七反五畝六歩 川欠引而

一八斗貳升七合貳勺

一八石貳斗七升貳合

一十貳石

い田川欠引而

吉三郎

一拾壹石九斗九升三合

ノ田

一六石六合壹勺

荒壹反十一歩 五畝 川欠引而

一壹石六斗九升三 六升八合四勺 ■ 勺

(七丁目表)

い田有高川欠引而

一四拾六石五斗七升九合貳勺

又左衛門組

ノ田

一拾八石九斗九升九合

同人

木原五反 七 ■ 畝廿七歩



一六石三斗六升九合

同人

辰改申候六ヶ所分高

一三石四斗八升三合七勺

曾根村

新五兵へ

荒式ヶ所分高

一荒七斗三升七合

同人

一壺斗四勺<sup>合高</sup>高

弥五郎

一八斗八升五合三勺<sup>合高</sup>高

善左衛門

一三斗九升五合

理右衛門

⑦ (七丁目裏)

(表紙)

未ノ年免割帳

酉ノ年

御地頭様高書此内ニ有

⑧ (八丁目表)

森河五助様入分

長蔵組

い田有高

彦根藩地方知行制における給所の存在形態

貳拾三石五合八勺

の田有高

九石四斗六升五合三勺

荒

三石三石壹斗九升七合五勺貳斗六升貳斗六升合六勺

合三拾五石七斗三升貳合七勺

(八丁目裏)

今堀弥太夫様入分

徳兵衛組

有高  
い田

貳拾三石三斗七升九合壹勺

有高  
の田

九石五斗三升三合八勺

有高  
荒

三石壹斗七升壹合五勺

合三拾六石八升四合四勺

ここでは表紙(⑦)が史料の中ほどに綴じられるなど、ランダムな状態になっていることが分かる。しかし表紙の上書や史料の内容を見ると、村内での年貢の割り付けについてのものが分かる。また「元禄四年末十一月十六日」、「末十一月十六日」、「末」などであり、元禄四末年の年貢についてのものであることが分かる。<sup>(28)</sup>おそらく、綴じ紐が外れた文書を綴じ直したものであろう。

さて、これによれば青山村に割り付けられた年貢は、村内で給所の組織である組に割り付けられていたことが分かる。また、その際には組の「有高」が割り付け額算出の基準となっていたことが分かる。例えば、④において「荒」分の年貢が組ごとに、「有高」（反別）に基づいて算出されているごとくである。<sup>(29)</sup> また、③では「い田」、「の田」、「荒」の分類ごとに年貢の割り付け率が設定されている。⑥では組ごとに「有高」から「川欠」分を引いた高が書き上げられている。<sup>(30)</sup> なお、「い田」、「の田」分の年貢割り付け額算出部分については、欠落したのか、史料4において見られない。<sup>(31)</sup>

なお、主な部分について補足しておく、①は「有高」から「川欠」分を引くためのもの、②は隣村曾根村入作分の年貢及び指口米、⑤は各給人に納めるべき年貢高の書上、⑦は綴じ紐が外れる以前の表紙、⑧は⑥の内容についての変更を示したものである。ところで、⑧は⑥の更新情報ということになるので、元禄四年以降のものとなる。したがって、史料4は元禄四年以降においても何らかの形で使用されていたものと思われる。

以上のように青山村での年貢の割り付けは、まず筋奉行によつて村に割り付けられ、そして村内で給所の組織である組に割り付けられるという形態をとっていたことが分かる。したがって、ここから明らかとなる給所の支配構造としては、村を介した藩による給所支配という構造である。

なお、年貢の割り付けではないが、前掲史料1においてもこれと同様の状況が見られる。すなわち、ここでは給所の指口米上納について、筋奉行から村宛に達書が出されている。ここでも藩による給所の支配について、右と同様、村を介した状況が見られる。

さて、村内で各組に割り付けられた年貢は、さらに組内で各構成員に割り付けられることになるが、その状況については史料が残らず確認することは出来ない。

## おわりに

以上、愛知郡青山村における給所の存在形態について、給人の知行状況、給所の編成状況、給所の組織、給所の支配構造の各点から分析を加えた。史料的な制約により、明らかに出来なかった点も多くある。他の給所の事例も含め、今後の課題としたい。

最後に本稿での分析に基づき、いくつか論点を示しておきたい。

まず、給人への土地の割り付けについてである。青山村でそれが確認できないことについてはすでに述べた。これについて注目したいのが、給所への年貢の割り付け方法である。すなわち、そこでは給所の組織である組が年貢の割り付け単位となり、割り付け額算出に際しては組の「有高」(組織成員の持高)が基準となっている。すなわち、そこでは給人の土地領有関係(給人と割り付け地との関係)が機能していない<sup>(32)</sup>。したがって、青山村では給人への土地の割り付けが行なわれていなかったか、行なわれたとしてもそれが機能していなかったことが想定される。断片的な事例であるので今後も検討の余地があるが、彦根藩の地方知行制の特質を考えるうえで興味深い<sup>(33)</sup>。

次に、村との関係についてである。彦根藩の給所村落では、給人の支配単位である給所と、藩の支配単位である村が併存している<sup>(34)</sup>。本稿では給所の存在形態ということで青山村の給所の側面に限って分析を加えた。しかし、「四 給所の支配構造」において見た通り、給所への年貢の割り付けにおいて、村が藩の給所支配を介するものとして機能している。したがって、給所の支配構造についてより正確に把握するためには、村を含めたうえでの検討が不可欠である。そして、そのためには給所村落における村の存在形態を明らかにすることが必要となる。また、これとは別に、青山村では給所の組織として編成された組が村の下部組織として機能している状況が見られる<sup>(35)</sup>。これについても、右と同様、村との関係において検討する必要がある<sup>(36)</sup>。今後の課題としたい。

註

(1) 「彦根藩の地方知行について」(『人文地理』九六一

九五八年、のち『幕藩社会の地域構造』大明堂 一九七〇年所収)。

(2) 「彦根藩前期の知行制」(『彦根藩の藩政機構』彦根城博物館 二〇〇三年)。

(3) 万治三年「指口米上納二付達書」(『青山区有文書調査報告書』(愛東町教育委員会 二〇〇五年。以下、「青山報告書」と表記する)、四三頁。史料1として後掲)、元禄四年頃「六組御地頭御取」(同、六八頁。史料4の⑤として後掲)、宝暦六年「青山村給人知行高書上」(同、四三頁)、年末詳「青山村給人知行高書上」(同、四三頁)、天保十年「村中高書帳」(同、五一頁、嘉永五年「御種情ケ元帳」(同、七六頁)、明治元年「曾根夫米一步米帳」(同、一〇六頁)、明治八年「庚午御普請手辰年賦拝借割帳」(同、一〇九頁)、文政十二年「知行取人数拜知郷小前帳」(『新修彦根市史』第六巻史料編近世一)〈彦根市史編集委員会 二〇〇二年、二三二号〉をもとに作成。なお、「六組御地頭御取」については、正確な年代が特定できない。しかし、ともに綴られている文書により元禄四年、もしくはそれに近い年代であることが分かる。そのため、ここでは元禄四年頃とした。

(4) 前掲注(2)。

(5) 前掲注(3)。差出のうち石原、河手、太田、大久保の四名は筋奉行である(「彦根藩役職補任表」(『彦根藩の藩政機構』)。竹原、山下、安藤の三名については確認でき

ない。

(6) 東谷智「彦根藩筋奉行の成立と機構改編について」(『彦根藩の藩政機構』)。

(7) 寛文元年「青山村検地帳」(『青山日吉神社文書』、東近江市史編さん室所蔵写真版)、年末詳「青山村検地帳」(『青山区有文書』一四、同写真版。なお「青山区有文書」のうち「青山報告書」に史料として掲載されていない分は、同書の目録番号を示す)。

(8) 「青山区有文書」二〇一九四。

(9) 「青山報告書」によれば、元治元年までの免状の発給者は彦根藩筋奉行、慶応元年は信楽代官多羅尾主税、同二年は大津代官石原清一郎となっている。

(10) 前掲注(1)。

(11) 前掲注(1)。なお藤井氏は正保二年以前も同様であったことを指摘されている(前掲注(2))。

(12) 前掲注(7)。

(13) 文化十三年「永代売渡シ屋敷一札」(『青山区有文書』一二)、天保三年「永代指上申畑請屋敷敷之事」(『青山区有文書』二八七)。

(14) 寛文五年「組別分米高書上」(『青山報告書』、四四頁)、元禄四年「上下有高川欠引而残り」(同、六九頁。史料4の⑥として後掲)、年末詳「給人入高明細」(同、七〇頁。史料4の⑧として後掲)、天保十年「村中高書帳」(前掲注(3))、嘉永五年「御種情ケ元帳」(前掲注(3))、明治元年「曾根夫米一步米帳」(前掲注(3))、明治八年「庚午御普請手辰年賦拝借割帳」(前掲注(3))をもと

に作成。なお、寛文五年と元禄四年の給人の根拠であるが、寛文五年「組別分米高書上」には組ごとに、「有高」の内訳が記され、そのあと「当り」として他の組から

については、元禄四年、年代未詳分をもとに組と給人の対応関係が判明する。残りの善太郎組と吉三郎組については、「有高」の数値により、給人が推定される。

「有高」の高を差引した高が記されている。各組の「当り」高の全体で占める割合を示すと次の通りである（小数点第一位以下は四捨五入）。市郎右衛門組一三・〇%

(15) 寛文五年「組別分米高書上」（前掲注(14)）、元禄四年「上下有高川欠引而残り」（前掲注(14)）、年未詳「給人入高明細」（前掲注(14)）をもとに作成。

(五七・五三七七石)、半右衛門組二〇・九%（九二・三二五八石）、門三郎組二六・四%（一六・八六四九石）、伝右衛門組二六・三%（一六・五四二二石）、九

(16) 語意による。なお、後述する通り「有高」は村内での年貢割り付け額算出の基準となっている。

兵衛組一三・四%（五九・三二六四石）。あわせて万治三年の給人知行高の村全体で占める割合を示すと次の通りである。西山内蔵亮一三・〇%（五九・六八五石）、

(17) 寛文元年の検地帳は、田地、「木原田」、畑地、屋敷地の地目順に書き上げられている。このうち田地は、さらに「上之段」分とそれ以外の分とに分けられている。

三浦十左衛門二〇・九%（九五・七六八石）、勾坂縫殿之介二六・四%（二二・二二二石）、石原主膳二六・三%（二二・〇・八八八石）、二宮膳弥一三・四%（六一・五三七七石）。ここでは「組別分米高書上」において、

「上之段」とは、現在でも青山周辺地域で使用される言葉で、村域を横断する河岸段丘の上側を表す。これに対して、段丘の下側は、下の段と呼ばれている。検地帳の田地のうち、「上之段」以外の分は段丘の下側、すなわち下の段の田地であると思われる。さて、それぞれの合計反別をあげると、下の段の田地は一八町四反二六歩、

各組の「有高」が、給人知行高の村全体での割合と一致するよう、「当り」高として調整されていることが分かる。これにより、寛文五年については組と給人の対応関係が明らかとなる。次に、元禄四年については「有高」

上の段の田地は五町一反三畝二三歩、「木原田」は四町二反五畝八歩、畑地は一町八反八畝九歩、屋敷地は八反五畝二歩となっている（破損により判読不明の六筆は含まず）。あわせて、寛文五年「組別分米高書上」での

の内訳により（表3参照）、市左衛門組は寛文五年の市郎右衛門組、十右衛門組は同じく半右衛門組、茂左衛門組は同じく門三郎組とそれぞれ同一の組であることが分かる。また、同じく「有高」の内訳により（表3参照）、

と、「い田」「の田」「荒」の各分類の地目別の反別を見ると、「い田」田地は一八町五反二畝六歩、「の田」田地は四町二反九畝二四歩、「荒」は四町二反四畝八歩、「い田」及び「の田」畑地合計は一町八反八畝一〇歩、「い田」屋敷地は八反五畝二歩となっている。ここでは検地

又左衛門組は、年代未詳において長蔵組と徳兵衛組に分割される組であることが分かる。したがって、この四組

帳の下の段の田地と「組別分米高書上」の「い田」田地、同じく上の段の田地と「の田」田地、同じく「木原田」と「荒」、同じく畑地（下の段、上の段の分類はなく、両方を含むと思われる）と「い田」「の田」畑地合計、同じく屋敷地と「い田」屋敷地のそれぞれで、反別が一致しないは近似している。ここから「い田」は段丘の下段、「の田」は段丘の上の段を表すと考えられる。なお、青山の集落は段丘の下段、すなわち「い田」に立地している。

- (18) 天保十年「村中高書帳」（前掲注(3)）、嘉永五年「御種情ケ元帳」（前掲注(3)）、明治元年「曾根夫米一步米帳」（前掲注(3)）、明治八年「庚午御普請手戻年賦拝借割帳」（前掲注(3)）をもとに作成。なお、明治元年と明治八年については、上知以前の組構成員の状況がある程度、反映したと思われる。そのため、ここでは分析において採用した。また、表2の備考で述べた通り、各組構成員の全てを表すものではない。

- (19) 天保十年「村中高書帳」（前掲注(3)）をもとに作成。
- (20) 「青山区有文書」一三八。

- (21) 前掲注(7)。

- (22) 彦根藩給人の給所知行権は、年貢収納権などに限られたものであった（前掲注(2)）。それ以外の支配については、藩によって村に対してなされている（前掲注(1)）。

- (23) 『青山報告書』、五六頁。

- (24) 前掲注(2)など。

- (25) 「彦根藩役職補任表」（『彦根藩の藩政機構』）。

- (26) 前掲注(8)。上知以降の分は除く。

- (27) 『青山報告書』、六五頁。

- (28) あいにく元禄四年の免状は残されていない。

- (29) ここでは反別が算出基準となっているが、史料4の⑥によりそれが「荒」の「有高」についてのものであることが分かる。

- (30) これによれば「の田」に「川欠」分はない。段丘の上の段に立地したからであろう（前掲注(15) 参照）。なお、青山村では村の南側を流れる愛知川の氾濫により、しばしば下の段の田地が被害を受けている（『青山区有文書』二三四、二四六、二四八など）。

- (31) 史料4には抹消や書き換え箇所が多く、数値が一致しないことも多い。しかし、年貢が村内で組に割り付けられているという点と、組「有高」が割り付け額算出の基準となっている点に影響を及ぼすものではない。

- (32) 例えば信州松代藩では、給所への年貢割り付けにおいて、給人の土地領有関係が機能している（鈴木壽「近世農村構造の一形態―松代藩の農村構造」『歴史学研究』一四九 一九五一年、のち「近世知行制の研究」日本学術振興会 一九七一年所収）。

- (33) 蒲生郡小脇村では土地の給人分付が確認できる（『山田富二男家文書』〈東近江市文化財課所蔵写真版〉、史料の所在については彦根城博物館渡辺恒一氏のご教示を得た）。したがって、彦根藩において、給人への土地の割り付けが実施されなかったということはない。

(34) 前掲(1)。矢守氏は、彦根藩の郷村統治・徴税組織を整理されるなかで、給所を徴税組織(「知行取―地頭組―百姓」)、村を統治組織(「藩―筋奉行―代官・手代―庄屋・横目―五人組―百姓」)と位置づけられる。しかし、氏は結論として図を示されるのみで根拠や解説などは述べられない。

(35) 例えば御種借米と御情借米の借用ないしは返済、また、夫米・百人組郷中間米・掃除米の負担において、給所の組織である組が村内での割り付け単位として機能している(『青山報告書』、七二頁・七五頁・七六頁・七七頁・七九頁)。

(36) 給所の組織である組が青山村の上知以降も変質して機能している状況を「一 給人の知行状況」において指摘したが、そこでの機能は村の下部組織としての機能である。したがって、それについても村との関係において検討する必要がある。